「元気が一番」塾　　2010.2.20　仲島 正教

書くことのすすめ

「字を書く」ことは、感動を生み、未来を切り拓き、幸せな生活をつくっていく。
識字学級で、常光春子さんが６０歳で生まれて初めて書いた自分の名前、その感動。

「書く」という学習は

教師にとっても、子どもにとっても「書くこと」は、とても大切な学習です。
　　→なぜなら「書くこと」によって、自分自身を振り返ることができるからです。
振り返るからこそ、成長があり、伸びていくのです。・・・しかし、そうは言っても
　　→「書くこと」は子どもにとっても教師にとっても、なかなか手強いものです。

１．子どもが書く・・・「書いてみたいな」 そう思わす作文（綴り方）指導の工夫あれこれ
～「え、また書くの？」「書くことがない」「半分でいい？」「作文きらい！」からの脱却～

・思わず書きたくなる工夫を　　これなら書けそうだ
　［したこと作文］・・・灰谷健次郎「兎の眼」より足立先生の授業、小谷先生の授業
　［先生あのね］［先生に言いたいこと］・・・こんな書き出しによってすんなり書ける
　［見たこと帳］［30 日日記］・・・ノートに書きとめていく楽しさ、先生との交換日記
　※用紙の工夫→「原稿用紙」よりも「小さな用紙」「太い罫線」「半分のノート」
・書いたら、必ず紹介する。みんなの前で読む。→学級通信に書く。文集にする。
・上手く書けた、たくさん書けたという経験を積む
　ほめられる、認められる（ほめるコツは、全体ではなくこの部分がいいとほめる）
　　→短い文や短い言葉からも子どもの心の機微を感じ取れる教師でありたい
　原稿用紙３０枚へ挑戦・・・自分が作者の［修学旅行物語］を書き上げた自信
　　→「出来るか出来ないかではなく、やるかやらないか」それは教師も子どもの同じ
・一番の指導は・・・作文指導のテクニックというよりどれだけ感動体験をするかである
　　→心が動けば、自分で書き出すもの
・温故知新、不易流行・・・東井義雄（とおいよしお）戸田唯巳（とだただみ）の綴り方
　　→今読んでもスゴイ２人の実践！　古本屋で探し出してもぜひ読みたい２人の本

２．先生も書く・・・書くことで先生も成長する、うんと成長する

・学年だより、学級通信を書く。少しユーモアと子どもの姿が入ると楽しい
　→書くことで、自分を、子どもを振り返るきっかけとしたい。文字や言葉によるフィードバックは子どもに自信を持たすことができる。いい言葉や感動の出来事を残していく作業は楽しいもの。教師も子どもも元気が出てくる。
・連絡帳に書く、連絡帳は家庭との交換日記。10 行書いてきたら 10 行書いて返す
　→大事なことだけでなく、しょうもないことも書くといい。そこから本音が出る
・子どもの記録をつける習慣。気づいたときにすぐに書かないと忘れてしまう。
　→記録ノートを必ずつくる　時々で書く、子どもの意外な面の発見が宝物になる
・研究授業をして指導案をしっかり書く。（センスだけでもうまい授業はできるが・・・）
　→指導案をしっかり書くことで、授業力はさらにアップする。
・実践記録も書いてみる。「文字に残す」取り組みを。そして、どこかで発表を！